

## 【「赤松小三郎エッセイ賞」優秀賞】

### 赤松小三郎と私

唐澤 健治

(64歳、長野県諏訪市、高校講師)

この道を辿るのは何回目だろうか。四条通りから東洞院通りを南下する道である。かつては洛外に出ると竹田街道となり伏見と洛中を結ぶ物流の主要街道として賑わっていたであろうこの道も、烏丸通りにその座を譲り、今は閑散とした道である。

慶応3年9月3日夕刻、小三郎は何を思いこの道を歩いていたのだろうか。この道を辿る度に私が考える事である。幕薩一和を唱え、内戦阻止に奔走しながらも時勢は願い通りには進まない苛立ちや、藩命により帰国せざるを得ない無念の気持ちだったのか今は知る由もないが、おそらく複雑な気持ちを抱えて歩いていたのではないだろうか。

五条通りを過ぎ、魚棚町の今は駐車場となっている片隅にその石碑は建っている。正面に「贈従五位赤松小三郎先生記念」と刻まれた石碑は京都市内に点在する他の幕末史蹟碑とは異質のものである。ここは小三郎が暗殺された場所である。確かに石碑左側には「慶応三年九月三日於此遭難」と刻まれてはいるが、むしろ「従五位追贈」を強調しているように思われる石碑である。建碑は京都長野県人会の前身である京都信濃会による。年代も追贈から20年余り経った昭和十七年であり、おそらく太平洋戦争開戦による戦意高揚の意図を含んで建碑されたものと思われる。維新功労者を記録した宮内省制作の『修補 殉難録稿』に小三郎の名はなく、公的には維新功労者として位置づけられていないのにも関わらず追贈が行われている事実には、東郷平八郎ら海軍関係者の後ろ盾はあったにせよ上田出身者の努力が偲ばれる石碑である。

石碑に手を置き、刺客が現れたであろう東洞院通りの南側を見ながら暗殺時の状況を瞑想する。刺客が見知っていた中村半次郎らであることは瞬間的に小三郎も認識したであろうが、薩摩示現流の一撃は一瞬にして小三郎のすべてを奪ったのである。無念であっただろう。小三郎の血が流れたであろう道路にも手を置き、小三郎の想いを感じ、歴史研究者の端くれとして、正しい歴史観で歴史を捉えていかななくてはと痛感する私である。